

だんだん便り

第 10 号

2018年8月10日

一般社団法人だんだん会

408-0035 山梨県北杜市長坂町夏秋 918-5

- ・法人本部 0551-45-9566
- ・地域看護センターあんあん 0551-30-7505
- ・定期巡回てくてく24 0551-30-7787
- ・オレンジサロンわいわい白州・長坂 0551-45-9566

- ・グループホームわいわい白州 0551-30-7566

408-0315 山梨県北杜市白州町白須 1023



写真に寄せて

今、咲いている花はヤマユリです。1,100mのこの地で咲くのはお盆のころです。中学生時代、奥三河の野山で初めて出会ったときには野に咲く花でこんな美しい花があるものだと感動したことを思い出します。

小山 茂 氏

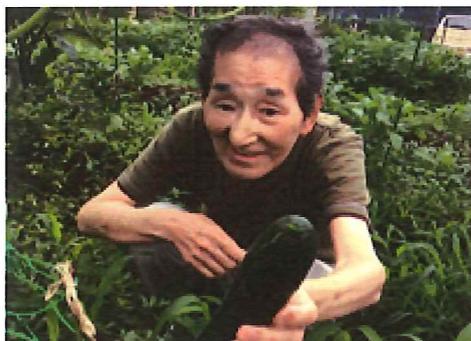
訂正とお詫び：前月号で、写真提供の方の氏名が間違っていました。前月の写真提供・文は、今月号と同じ小山茂氏です。お詫び申し上げます。

グループホームわいわい白州

最近の”尾白様子“ 誕生日会・収穫・ほのぼの・他

尾白 ユニット職員 湯舟康弘

お誕生日おめでとうございます。お誕生日会は盛大にパーティー♡主役の大好物からたくさんのごちそうとお酒にジュースで皆さんで盛り上りました。
最後はバースデイケーキ♪ 皆様、デザートは別腹です。



収穫!! 大きな胡瓜を取ったぞお～～☆



難しいわね。これがここで、う～？

オレンジサロンわいわい長坂・白州・こぶち

オレンジサロンわいわい白州・長坂

猛暑続きの今夏。「熱中症に厳重警戒！！」「暑さから、命を守るよう対策をしてください！」



毎日、テレビやラジオから聞こえる呼びかけ、また今日も…と慢性になってしまった言葉だと受け止めながら、あらためて注意をしなければと思う緊張感、そんな中でサロンが始まります。

参加者の皆様の顔色、表情、動作・仕草の様子を観察しながら、「具合は悪くないか？」「気になる体調のことはないか」ボランティアが一人一人に確認するところから始まります。

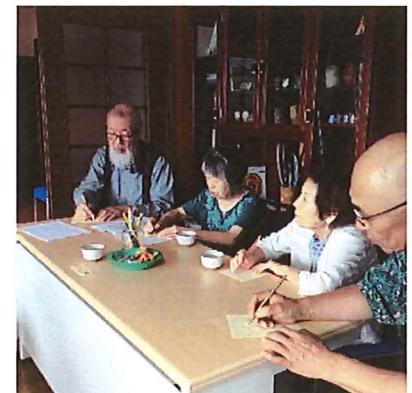
水分の摂取は切れ目なく、塩分摂取に飴や漬物などを用意。お茶を飲みながら、食事ができているか、夜間の睡眠はとれているのか、それとなく聞きながら、いつもより気を配って開催している現状です。サロンの間も参加者の観察は欠かせません。

エアコンなんかなくても過ごせた避暑地の北杜市！

日中が暑くても夜間や朝はぐっと気温が下がって、
過ごしやすいこの北杜市も今年ばかりはそうはいきません。

不要不急の外出も避けて…

皆さんは、この暑さと、がつり向き合っています！



月が替わって8月、夕方には蜩も「カナカナカナ…」と泣き始めました。

暦も立秋、この暑さももう少しかな…

オレンジサロンわいわい こぶち

いよいよ、始まりました！ 小淵沢でのサロン。

7月25日水曜日、参加者3名の方が緊張の面持ちで、また期待感も持たれての参加でした。

生活の根拠をこちらに移して25年、以前の記憶のままの「東京」に行ってみたいというお気持ちをお伺いして、胸が痛くなりました。

また、「のどかで静かな環境で仕事が進んでいます」というお話も伺い、草取りに追われている田舎暮らしに共鳴し、これからは、家族のためにではなく、「ご自分」のために時間を使って「おしゃべりをたくさんして」「たくさん笑って」、いくつになってもその年齢なりの自己表現、自己実現をしてほしいと思っています。そのための応援ができるような「サロンわいわい こぶち」を創り上げていきたいと思っています。

初日は、ボランティア4名、参加者さんよりも期待と不安で皆様の参加をお待ちしておりました。

終わった後の「いい出会い」に感謝しております。

グループホームわいわい白州

ホーム長交代

6月よりホーム長が交代になりました。開設準備から1年余ホーム長を務めた山下健一さんから宮崎和加子への変更です。「グループホームわいわい白州」は、単にやって差し上げる介護をするのではなく、『徹底した自立支援』で入居者の皆さん的生活支援をするというやり方です。その経験をずっとしてきた山下さんに立ち上げの時期をホーム長として奮闘していただきました。このたび、その任を果たし退職することになりました。

そこで、私がホーム長の役割を果たすことになりました。東京在住のころは、グループホームのホーム長をはじめ、グループホームを6か所(9ユニット)の開設運営責任者を行っておりました。久々に入居者と職員と地域の皆さんとじっくりとかかわらせていただき、入居者のみなさんが自己主張し、伸び伸びと共同生活できるように頑張っていきたいと思っています。

理事長の役割も果たしながらなので、運営の方法を変えて、各ユニット(摩利支天と尾白)のユニット長の他に副ユニット長を配置して、さらに強化した体制で運営していきます。

摩利支天=ユニット長…近藤 浩、副ユニット長…海野恵美

尾白 =ユニット長…立花明子、副ユニット長…大久保利恵

今後ともどうぞご指導をお願いいたします。

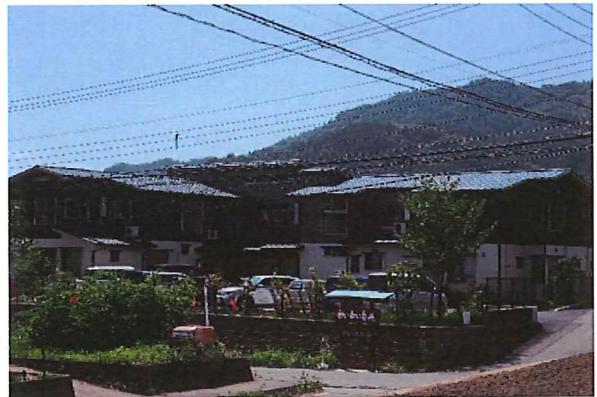
ホーム長 宮崎和加子

★入退去：昨年4月のオープン時に18室が満室になりました。その後、1年3か月の間に退去なさったのは1名。新入居が1名です。

★現時点で、入居待機者は16名です。



東側からみた「わいわい白州」



北側からみた「わいわい白州」



グループホームわいわい白州

現在、入居者 18 名。入居している方々の概況は以下のようです。

男女

	尾白	摩利支天	合計
男性	2	1	3 (16.7%)
女性	7	8	15 (83.3%)

食事介助の有無

	尾白	摩利支天	合計
必要	0	1	-
自立	9	8	-

年齢

	尾白	摩利支天	合計
60代	0	2	2
70代	2	1	3
80代	5	4	9
90代	2	2	4
平均	86.4	82.3	85.2

排泄の状況(オムツ類使用の有無)

	尾白	摩利支天	合計
使用	5	7	12 (67%)
未使用	4	2	6 (33%)

住民票所在地

	尾白	摩利支天	合計
明野	0	0	0
須玉	0	0	0
高根	3	0	3
長坂	1	0	1
大泉	1	1	2
小淵沢	1	1	2
白州	3	7	10
武川	0	0	0

出身地

北杜市周辺	7
北海道	2
関東	2
東海	1
関西	1
北陸	2
九州	3

参考

2.33 3.22

2017年8月

新連載：てくてく物語 <その1>

『定期巡回てくてく24』(定期巡回・随時対応型訪問介護看護事業)の活動内容の一端を連載でお伝えします。

家の中に入れてもらえない……これぞ ホントの安否確認！

とにかく、安否確認を

春から『てくてく』の対象となった春江さん(仮名、80歳、女性)。長い間、生まれた実家で一人暮らしをされている。人生いろいろあったのだろうと推測されますが、一人で家を守ってこられたのだと思います。

春江さんは、人との付き合いがあまりなく、気がついたらかなりの認知症になっており、キーパーソンで遠方に住んでいる甥の幸次さん(仮名)は戸惑ったといいます。春江さんは、記憶障害などの自覚は全くなく、「なにも困っていない」と何のサービスも受けようとなさらない。

ケアマネジャーから「てくてく」への依頼は、「声掛けと安否確認」です。

一人で閉じこもっている、
生活の様子がまったくわからない、
食べているのかどうかもわからない
という状況なので、とにかく、一日1回は訪問して、
安否を確認してほしいということでした。

私は大丈夫と

さあ、訪問開始です。「こんにちは」と玄関でチャイムを鳴らしても出てこない…。やっと出てきても玄関先で、「私は、若いころスポーツをしていたので元気なよ。ちゃんと食べていますよ。何もお世話になることはないので」と、家の中に入れてくれようとしない…。

時には、玄関に鍵がかかっていてチャイムを鳴らしてもまったく反応がない時も。そういう時には、時間を見計らって何度も訪問して安否確認しています。

時間に関係なく、何度も訪問できるのが「てくてく」の良さ。

家の中に食べ物を放り投げて

そうはいっても、中から声はするのに本人に会えない日もあり、「てくてく」で訪問することでいいのだろうかと悩んで、甥御さんに相談したら、「声がするのは生きている証拠だし、何ならおにぎりやパン・お菓子などをちょっとの隙間や空いている窓から放り投げてください。たぶん食べるでしょうから」というのです。…了解…

いつしょに食事ができた！！

そんな中で、「きょうは、お食事を持ってきたので、いつしょに食べましょう」と、コンビニ弁当持参(甥御さんからお金を預かっているので)で訪問したら、「あら、いいですね。どうぞ」と家の中に入れてくださって、いつしょに昼食を食べることができたのです！！

いろいろ工夫して「おまんじゅうを」「おかずを」と家の中に入れる確率が高まってきた。

ゴミを捨てさせていただけない…

今、困っているのは、『ゴミ』。「私が捨てるの結構です」と。たくさんのゴミ袋がたまってきて、臭いがこもって…。
てくてく職員の会話。「今日は、大成功！！ ゴミを持ち出せたよ！」「すごい！ どうやって成功したの？」「ええとね…」
毎日が刺激的です。



昨日まではあんあん、今日からてくてくで歩きましょ！

地域看護センターあんあん 看護師 浅見玲子

「あらっ？雨戸が閉まってる！ なぜ？」

ドキドキしながら慌てて雨戸をあけて家の中に入ります。「幸子さん、幸子さん、大丈夫ですか？」

いつものようにベッドに横になっている幸子さんに声をかけますが、高熱がでて朦朧としていました。

「ここまでよく頑張りましたね。でももう頑張るのはお休みしましょう。入院しましょう。」

私は、すぐにかかりつけの基幹病院の主治医に連絡をとり救急搬送する段取りをしました。担当のケアマネジャーにも来てもらい入院の準備を行い、救急車を手配しました。

犬の「クッキー」との暮らしが大事

幸子さんは、数十年前にご主人と犬のクッキーと一緒に移住してきました。脳梗塞を発症したご主人は、幸子さんの献身的な介護を受けていましたが、将来的なことを見据えて施設に入所されました。

その後に幸子さんはリウマチが発症して全身の関節痛に襲われるようになります。治療にあたった医師からは強く入院を勧められましたが、夫婦で自分たちの子どものようにかわいがっていたクッキーの世話があるため、在宅での治療を希望され、あんあんの訪問看護と週1回のヘルパーさんの支援を受けながらこの1年頑張っていました。

幸子さんは全身状態からするとあきらかにサービスを増やす必要がありましたが、なるべく人に迷惑かけないように自分でできることは自分でという気持ちが強く、サービスを増やすことには積極的ではありませんでした。

入院、そして退院

幸い入院して治療することで、幸子さんは回復していきましたが、医師からは「今回は危機一髪だった。数日入院が遅れていたら生命の危険があった」と。

退院の前にケアマネジャーと訪問看護師が病院に出向き、これから在宅で暮らすための話し合いを行いました。幸子さんは回復したとはいえ要介護3の車椅子生活です。入院前のようにご自分の力だけで生活を続けていくのは不可能です。それでも「施設入所などは考えたくない。自宅に戻りたい」と強く希望されました。

そこで、みんなで話し合った結果、24時間365日、毎日、複数回訪問して支援する『定期巡回で24』のサービスを利用することにしました。

「あんあん」と「てくてく」

今、幸子さんは「てくてく」の支援を受けながら大好きなクッキーと自宅で暮らしています。

一日3回、看護師か介護職が訪問して、モーニングケアから始まり、排泄のこと食事のこと家屋内の掃除やゴミ出し、洗濯などを行います。

「幸子さん、どうですか？ “あんあん”から“てくてく”的なサービスを受けるようになって」

「そうね、一言でいうと『安心』ね。ほんとうに安心して生活できます。」と答えてくれました。看護師は医師の指示でリウマチの注射を自宅で行っています。急性の変化を見逃さないように注意深く毎日みています。そして介護職と協力して日常生活支援をしています。つまり、

Weekly Care(週単位でのケア)から

Daily Care(日単位でのケア)へ

ご本人が決めた生きる場所での生活の実現

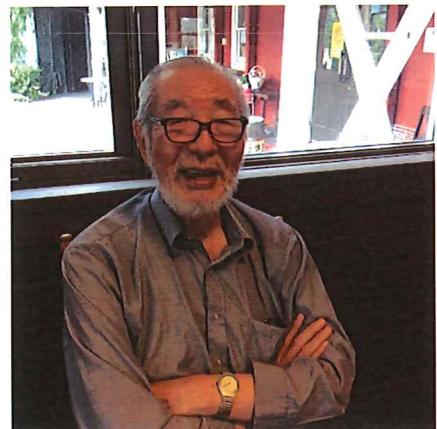
私たちは、その方が自分らしく生きる人生の実現のために、看護と介護が一緒になって支援する集団なのです。



応援します！ 手伝います！ 寄付します！

自然な交流を求めて・・・

北杜市白州在住 古谷 泰章さん



御年81歳、山口県出身で、30年ほど前に白州町に別荘を所有。奥様とご一緒に白州に来て自然を満喫。その奥様が生前「(ここは) 気分がいいね」ととても気に入っていたので、6年前にお一人になられてから、家族が心配するなか移住をされてきました。

「一病息災」、近所のかかりつけ医には何かと体のことを相談できる環境にあります。そして、自分自身の健康づくり、介護予防にと市が主催する講座や研修会に積極的に参加して、今があります。

平成28年「介護支援ボランティア講座」を受講され登録することになりました。そこから当法人のオレンジサロンを紹介され、「介護支援ボランティア」として、参加者の方との話しあい、傾聴、話が少ない方には言葉をかけて会話を弾ませてくださっています。「何かボランティアをしなくては」という強い気持ちを表に出しているわけではなく、自然にふれあうよう心掛けています。同じ高齢者として、同じ立場で参加者の一人として、長いお付き合いをしたいと話してくださいました。

最近では、和田行男氏著（宮崎和加子サポーター）の「大逆転の認知症（痴呆）ケア」（中央法規出版）という本に巡り合って、今ある、悩みや不安（持病からの）に向かっていける理屈抜きに勇気づけられると、ことあるごとに本を返し返し読んでいたとのことでした。

「グループホームわいわい白州」では、素人ですが団碁のお相手もされて（ボランティアで）、生徒として教えていただきながら、入居者さんと真剣勝負をしてすっかり負けたそうです。

サロンでは、名前を間違わないように気を付けたり、以前は心の奥で「だれか会話ができる自分に合う人」を探していましたが、いまでは「一期一会」人の出会いを楽しみ、皆さんと「響き合いたい」と願っているとのことでした。

インタビュー 理事：中嶋登美子